

「ワタツミと共に一インドと故郷女川町」

1960年5月24日朝3時過ぎ、町の消防がけたたましい音でサイレンを鳴らし続けた。親に起こされ家の2階から降りる時に、窓から見た空の色はいつもと違い血の色にも似た朱赤で一面覆われ、異様な恐ろしさが体を包んだ。

何が起きたのか。海岸通りの商店街に沿う県道には近所の住民が皆驚いて飛び出してきた。何が起きたんだと寝ぼけ眼で言い合う。津波が来るらしいと町の長老の一人が言い始めた。チリ地震の大津波が日本に到達した。

町民の誰も分かっていない。日本より1万八千キロも離れた南米チリで前日に起きた地震で津波が時間をかけて、太平洋上のハワイを襲いその後日本へと矛先を向けた。東北三陸海岸一帯がその大波をまともに食らった。

家では37歳の父、60代半ばの祖父が町をまとめるべく対応したが、昔三陸を襲った昭和8年の大津波の記憶があったとは思えない、皆が右往左往していた。町の古老たちが、どのくらいの波が来るのだと、余裕を見せ会話していたのが記憶にある。

多くの民が女川湾の岸壁を取り囲むように集まってきた。波が町に達するには時間があった。海岸の波が大きく引く現象が先に現れ、その引き潮が増して海底が次々に露出し海底の岩石が茶や黒い岩肌を見せ始めた時には皆顔面蒼白、驚きの声を上げた。小学生だった私にも、何か異常なことが起きつつあると感じられ身が引き締まった。

細いあごのような女川湾の入り江を通して津波が到達するまで時間があった。90歳になる曾祖母がまだ元気で、足が立たず家に残る動きたくないといっごねるのを祖父が説得して年の割に大きな体の曾祖母を皆で担ぎ無理やりリヤカーに乗せ、親戚の住む山のほうに移動した。家は学校の教科書を取次ぐ本屋で海岸通り商店街の中心にあったが、1階にある書籍雑誌類を運ぶのか、どうすべきか話すまもなく、曾祖母を避難させることだけで手いっぱいとなり、家族全員で高台の親戚の家に逃げた。

その後の海の様子は直接見ていない、あとで町のものから聞けば、見たことのない引き潮の後に海面が盛り上がるようにして時間をかけて何度か襲来した。幾度目かの大波で、海岸近くのすべての店が1階の高さまで波が洗い去り本屋では書籍雑誌の置いてあった陳列台ごと海にもっていかれた。

町は海岸から2キロ程平坦な道路が続き、それが大波の通り道となって津波による町の損壊に手を貸した。町の人たちは高台に逃げており波が町を襲った時は、津波の成すすべのない破壊力を高台から眺め見守るしかなかった。

その後は、自衛隊の救援に助けられた。全員に提供された脱脂粉乳ののがい味が今も強烈に残っている。このチリ地震津波の被災経験は果たして町の歴史、そして町民の語り継ぐ知恵として、将来の被災対応に活かせることになったのだろうか？

日本経済はこの時、既に高度経済成長期のサイクルに入り、1960年代から80年代後半まで20年日本の経済発展を享受した。人々の記憶の中からの津波被災は完全に忘れられたかに見える。そしてチリ地震津波被災の1960年から51年がたった2011年3月、地球は、海神はまたその牙をむいた。

私はこの時、インドのニューデリー南郊にあるグルガオンという町にある日系自動車部品製造工場にいた。(銀行から自動車部品製造メーカーに転職)。

インドは2010年前後から自動車産業が大発展の途上であった。経済成長で活気があった。日本からスズキ自動車、TOYOTA、ホンダ始め多くの完成車メーカーがこの国に進出し同国のモビリティゼーションを後押ししていた。

グルガオンは日系企業の進出増で駐在員の数が増え、日本の金属加工会社が、2008年から駐在員向けに日本食を提供できるホテルを建設し、疲れをいやす場を提供していた。その1社のホテルの小さな部屋に私は滞在していた。

3・11の翌朝、ホテルの社長が私のところに飛んできて「日本は大変です、大被災です。」と伝えた。日本から遠く離れた地で、故郷宮城県女川町と家族(母親、長兄、義姉)の安否を確認する手段もなく、日本からの連絡が入るのを心待ちにした。1月近く何も知らせが入らず4月に入り緊急帰国した。

道路も鉄道も遮断されたまま宮城行きは拒絶された状態。東京の叔父から、長兄は無事の確認が取れない母も義姉も分からないと聞かされ、目の前が真っ暗になった。

暫くして、幸いかな長兄は隣町の病院に親戚の一人を車で連れていったとわかり無事を確認したが、母と義姉の行方知れず、県が死体安置場所にした避難所を何?所も往復する日が続いた。

3・11大地震は午後2時過ぎに発生した、その時に町民はどのように行動したのだろうか。半世紀前のチリ地震津波の時は波が長い時間をかけてきたという記憶があり、あだになったのではないか。今回は地震発生後すぐに大波が町を襲った。

多くのものが逃げ遅れた。

本屋の裏手には、山がありそこに町一番の病院が立っている。そこへ逃げた人の記憶では、高台にある病院の駐車場にたどり着き安心もつかの間すぐに波にさらわれた。波に追われ人々は逃げ惑い、生き残った者は病院の2階以上に逃げかろうじて命拾いした。

チリ地震津波の被災時は、建物の1階はやられたが2階にいれば安全という思いが残った。今回、海岸通りにある商店街は全壊、先述の病院の1階、駐車場にあった車がみな波にさらわれ、海岸傍にあった町一番の地方銀行の堅固なビルも跡形なくさらわれた。

いち早く、しかも出来るだけ高いところへ一目散に逃げるという反省だけが残った。

多くの友人知人を失った。施設・建造物の多くも崩壊し瓦礫だけが無情に積み上げられた故郷の町の姿に接し発する言葉を失った。

あれから10年が経つ。

母は今も女川湾の中にいるはず。義姉の遺体がその後発見され、顔では判別つかず、当時身に付けていたエプロンに銀行通帳が残っていて、それで最終確認とした。義姉の遺体とともに母を合同葬儀の中に入れてもらい成仏を祈念するしかなかった。

被災から何年もたつのにボランティアの方が女川湾で潜水遺骨探しを続けている。県要請の自衛隊による正規の探索作業が終わって久しいが、その後も個人で捜索を続けている。本当に頭が上がらない、感謝するのみ。

3・11被災を世界が知った時、インド政府は直ちに46名のインド人救援隊を派遣、東北では女川町を選び1週間救援活動した。在日インド大使館は、女川町支援を続け毎年女川訪問、インド大使のワドワ氏は宗教の枠を超えて女川湾から金華山の黄金山神社にまで足を伸ばし被災者の御霊にお祈りいただいた。

私がインドに滞在中は、ONAGAWAの名前が現地の新聞に毎日のように報道されインド国民は貧富を問わず多くの方から女川は大丈夫なのかと励まされた。

インド国に対し、天皇陛下(当時)が同国を訪問され日本国として御礼を表していただいた。私は個人的に謝意を表したい気持ちから、女川町の一関係者として、2013年から2年間JETROでインドの廃棄物処理事業プロジェクトに参加し、南インドの地に日本の技術で産業廃棄物処理支援活動を行った。更に2015年からは隣国パキスタン(大きく言えばインドの一部)の自動車産業発展に寄与するJICAの国際協力プロジェクトに参加し、4年間の支援活動を行ってきた。少しでもお役に立てばという思いである。

日本は被災大国である、そして今回3・11被災を通じ出来たインド・日本間の「人の縁、国の縁」を大事にしたい。日印関係は8世紀のインド人僧の初来日から1300年近い、長くて深い絆にある。一つ二つ挙げれば、インドは毎年8月に広島長崎の原爆犠牲者に対し議会において黙祷を捧げ続ける唯一の国だ。また東京裁判でのパール判事意見は、日本人が問うべき歴史の真意を思い起こさせ、日本人の心を問うている。

女川町に実家はもはや跡形も無い。高台に残った家の墓から望める女川湾で今も救済を待つ母に向い、インド日本両国のため非力ながら貢献を続けると異国の地で誓った。(3・11被災後10年の思い)

投稿者： 佐々木 洋 英語 1973年卒業

本投稿へのご意見、ご感想等はこちらまで